

恵まれた生、限られた生を、私たちは無駄にしていらないでしょうか？

仏教では「生死」と、生と死をいつも一つにして考えています。すなわち、「なぜ死ぬのか？」といえは、「生まれたから」であり、「生きているから」であります。

生まれないものが死ぬこともありませんし、生きているないものが死ぬこともありません。ですから、死の因(直接原因)は生なにです。病気や事故は、死のきっかけとなった縁(間接条件)であります。

病気になって、初めて死がやってくるのでもなく、事故にあって初めて死に出会うのでもありません。

死は、この生命が、この世に誕生したときから、いつも生と同居しているのです。

私たちはそのことを忘れ、死を他人事として、毎日をウカウカと過ごしています。

私たちは、生きていることを当り前と受け取り、死を特別の出来事のように思っていますが、本当は逆なのです。生きているものにとって、死は当然のことであり、いつ何時、どのような縁で死ぬかも知れない私が、今、ここに生きていることのほうが大変なことなのです。

ある先生は、「生は偶然、死は必然」とおっしゃっています。私たちは、「生は当然、死は偶然」と思っているのではないのでしょうか。「あの人、たまたま悪い病気にかかったから死んだ」とか、「あの犬は、運が悪い」ぐらいにしか受け取っていないのではないのでしょうか。

あの人だけではありません。あの犬だけの問題ではありません。生きている以上、私たちも必ず死ぬのです。あまりうれしいことではありませんが、このことだけは、はつきりしておかなければなりません。

なぜ、こんないやなことを強調するのかといいますと、私たちは、死を忘れるとき、知らず知らずのうちに、生命を粗末にし、安易な生き方になるからです。

いつ何時、死に出会うかも知れない生命であるということを知った人は、恵まれたこの生命を粗末にすることなどできないはずでありますし、また、生きている今を、いい加減に過ごさずことなどできるはずもありません。仏教が、限られた生を一時も無駄にしないという意(こころ)のあらわれであります。

ヨーロッパにも、古くから「メント モリ」(死を忘れるな)というラテン語の句があるそうです。これも「短い生を、一時も粗末にするな」ということをいおうとしたものであります。

現代ほど、死を忘れさせてくれるものが、周りに充満している時代はありません。

私たちは、死を目前から遠ざけ、死を忘れさせてくれる現代という時代の中で、文字通り、死を忘れ、ひいては、生すら見失って、ウカウカと日を過ごしているのではないのでしょうか。

